

視覚特別支援学校専攻科生徒の視覚障害原因等の推移

—2000年度と2015年度調査結果との比較—

○柿澤 敏文 黄 柏翰 Hisham Elser Bilal Salih

(筑波大学人間系) (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

KEY WORDS: 視覚特別支援学校専攻科 視覚障害原因 推移

1. はじめに

2000年度と2015年度に実施した全国の視覚特別支援学校(以下、盲学校)に在籍する専攻科生徒の視覚障害原因等に関する調査結果を比較し、専攻科在籍者数減少の要因を検討した。

2. 調査方法と対象者

2000年ならびに2015年の7月1日現在で全国の盲学校71校(国立1、公立68、私立2)ならびに67校(国立1、公立65、私立1)に在籍した幼児児童生徒の視覚障害原因等の郵送法による質問紙調査を実施した。本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認(筑27-16)を得て、参加者に不利益が無いよう万全の注意を払って行われた。調査項目は、いずれも各幼児児童生徒の在籍学部、学年、性別、年齢、障害発生年齢、視力、視野、使用文字、視覚補助具、重複障害、視覚障害原因、眼疾患の部位と症状であり、ここでは、専攻科(保健医療科・理療科・音楽科等)生徒の性別、使用文字、年齢、眼疾患の部位と症状のデータを抽出し、各属性の人数の推移について、比較・検討した。

3. 結果の概要

2000年度と2015年度の調査で回答が得られた総数はそれぞれ3,965名と2,951名分であった。2000年度と2015年度の在籍者数の比は1:0.74で減少傾向にあった。そのうち、専攻科生徒は各年度で1,509名(全在籍者の38.1%)と888名(同30.1%)で、その比は1:0.59であり、専攻科生徒の減少の割合は盲学校全体と比較して大きく、直接確率計算の結果1%水準で有意であった(Table1)。

次に、2000年度と2015年度の専攻科在籍者の比1:0.59に基づいて、在籍者の属性ごとの各年度の比を検討した。男性は各年度で2,510名と1,786名であり、その比は1:0.56であった。女性は各年度で1,400名と1,108名であり、その比は1:0.64であった。いずれも、専攻科在籍者の比1:0.59と比較してその減少の割合は有意でなかった。点字使用者は各年度で256名と94名で、比が1:0.37であり、1%水準で有意に減少の割合が高かった。一方、墨字使用者は1,150名と726名で、比が1:0.64であり、その減少の割合は若干低かった(有意傾向)。年齢群について、21歳以下の人数はそれぞれ382名と197名で、比が1:0.52であり、その減少の割合は若干高かった(有意傾向)。22-30歳以下の人数は429名と162名で、比は1:0.38であり、1%水準で有意に減少の割合が高かった。一方、31歳以上は663名と521名で、比が1:0.79であり、1%水準で有意に減少の割合が低かった。眼疾患の部位と症状について、その減少の割合が有意(1%水準)に低かったのは緑内障・水(牛)眼、小眼球・虹彩欠損、視神経欠損、網膜色素変性であった。屈折異常、白内障(含む摘出後)、ベーチェット病、弱視、

Table1 2000年度と2015年度の在籍者数の比較

調査年度 属性	調査年度	
	2000年度 人数	2015年度 人数(比)
盲学校全体	3,965	2,951 (0.74)
専攻科全体	1,509	888 (0.59) ↓**
男性(専攻科)	1,068	603 (0.56)
女性(専攻科)	423	270 (0.64)
点字(専攻科)	256	94 (0.37) ↓**
音声教材(専攻科)		47 (0.18)
墨字(専攻科)	1,150	726 (0.63) ↑↑
21歳以下(専攻科)	382	197 (0.52) ↓↑
22-30歳(専攻科)	429	162 (0.38) ↓**
31歳以上(専攻科)	663	521 (0.79) ↑**

↑は減少の割合が低く、↓は減少の割合が高い
**は1%水準で有意、*は5%水準で有意、↑は有意傾向

Table2 眼疾患の部位と症状別在籍者数の2000年度と2015年度の比較

眼疾患の部位と症状	調査年度	
	2000年度	2015年度
眼球全体	112	103 ↑**
緑内障・水(牛)眼	45	45 ↑**
小眼球・虹彩欠損	1	5 ↑**
視神経欠損	55	9 ↓**
屈折異常	12	4
眼球ろう	13	5
白子	8	8
眼振	5	4
全色盲	10	2
眼球全体 その他	0	0
角膜疾患	13	9
角膜軟化症	29	11
角膜白斑	114	25 ↓**
角膜疾患 その他	6	3
水晶体疾患	0	0
白内障(含む摘出後)	15	11
硝子体疾患	13	5
硝子体混濁	43	11 ↓**
硝子体疾患 その他	3	1
ぶどう膜炎	388	281 ↑**
ぶどう膜炎 その他	69	44
網脈絡膜疾患	48	17 ↓*
網膜色素変性	55	40
網脈絡膜萎縮症	12	11
未熟児網膜症	36	18
網膜芽細胞腫	93	68
網膜剥離	45	15 ↓*
糖尿病網膜症	160	109
網脈絡膜疾患 その他	14	4
視神経視路疾患	6	7
視神経萎縮	13	1 ↓*
視神経炎	46	9 ↓**
視中枢障害	27	3 ↓**
視神経視路疾患 その他		
弱視	46	9 ↓**
その他(含む不明)	27	3 ↓**
総計	1509	888

↑は減少の割合が低く、↓は高い、**は1%水準で有意、*は5%水準で有意
その他の眼疾患(それぞれ1%水準)、網脈絡膜萎縮症、網脈絡膜疾患その他、視神経視路疾患その他(それぞれ5%水準)は有意に減少の割合が高かった。これら以外の眼疾患の減少の割合は、専攻科全体の減少の割合と有意な差が認められなかった。専攻科在籍者数減少の要因として使用文字、年齢群、眼疾患の要因が指摘できる。(KAKIZAWA Toshibumi, HUANG Po-Han, Hisham Elser Bilal Salih)